●sweeten●

アンバランス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
●ｓｗｅｅｔｅｎ●

【Ｎコード】
Ｎ２２６１Ｘ

【作者名】
アンバランス

【あらすじ】
甘いお菓子達の恋物語です。
ＢＬキライな人ｏｒ分からないって人は回れ右！退出だよー。
忠告したもんね！！！！しらないお！！！！！

●sweeten●

●sweeten●

☆種類
ショートケーキ
ガトーショコラ
モンブラン
ザッハトルテ
ミルフィーユ
アップルパイ
シュークリーム
フルーツタルト

☆性格とか（性別はみんな男の子でう！！）

●ショートケーキ（アルル）
僕っこの甘えん坊。まだ世の中の穢（けが）れを知らない純粋すぎる子供（笑）

●ガトーショコラ（紫衣（しえ））
とても大人な人。一人称は俺でみんなの世話役。頼りになる優しいお兄さんです。

●モンブラン（ノウン）
元気すぎて有り余ってしまった子。とにかく元気。一人称は俺っち。

●ザッハトルテ（カエ）
こちらも優しいお兄さん。ちょっとドジとかするけどたいていは静

かに暮らしている。
一人称は俺。

●ミルフィーユ（ミト）
乙女っ気の多い（おかまじゃないよ！）腐男子。一人称はウチ。とってもかわいい子。

●アップルパイ（ピエ）
すごくドSないたずらっ子。中身はとっても黒かったり…。でも優しいとこは優しい、いい子。一人称は自分。

●シュークリーム（優貴（ゆき））
人見知りが激しい子。執着心が強く一度手に入れたらなかなか離してくれない。
一人称は僕。

●フルーツタルト（美羽（みう））
すごく人思いな優しい子。でも、あまり人と話せない。一人称は僕。

●sweeten●（前書き）

●SWEETEN●
甘い甘いお菓子たち。
それは恋の味だったり…優しさだったり…
ケーキは姿形（すがたかたち）も可愛いけれど、性格と同じように中身も
いろいろ違ったり…
そんなお菓子たちの生活…見たくありませんか？
お菓子たちの恋を見たくありませんか？

ささ、こちらへどうぞ。
見物（けんぶつ）料金は頂きませんよ。あなたが好きなほど見て好きな程
頭に、
舌に、
その味を詰（つ）め込んでくださいな…

では、いってらっしゃいませ。

●sweeten●

●ｓｗｅｅｔｅｎ●　第１話

アルルは、１人、廊下を走っていた。
いや、急いでいたといった方がいいだろうか。
走っている彼の顔は何かに急き立てられるような恐怖と反対の楽しげな笑みを浮かべていた。

なんせ今日は…
「（僕の誕生日なんだ！！）」

そうやって腕に抱いていた人形を高く投げてはキャッチする。

っと、窓の外を見た。

「あ！優貴！！」

今日が帰国の日だったっけ？
と頭の中で考え、たたたッと裸足のまま、外に出る。

「優貴！！！」

そう言って彼に飛びついた。
優貴は少し戸惑いの色を見せてからフと笑って静かに抱きしめた。

「お帰りなさい！！」

「うん。ただいま。」

唯の挨拶でさえ優貴には幸せだった。

「アルル、裸足じゃないか…」

「いいの！だいじょうぶだもん！」

そう言うアルルに優貴は微笑む。

「ドイツはどうだった??」

好奇心旺盛のアルルを抱き上げ、優貴はにこりと笑った。

「たのしかった」

「そうか…とっても居心地がよかったんだね！！今度僕も連れて行ってよ！！」

と、アルルは嬉しそうに言う。

アルルは優貴が思っていることをすべて汲み取る。

たった一言いうだけでもたくさんの情報がアルルには伝わるのだ。

「もう少し大人になったらね」

そう言ってアルルの瞼にキスをする。

顔を赤く染めて少しはぶてたように口をとがらせる姿は正直…

純粋な子供の様でかわいらしい。

アルルはそんな表情を消すとおずおずと顔をあげた。

「皆（みんな）、中で待ってるよ？」

少し戸惑った顔をするのはアルルの番だった。

優貴は少し表情を曇らせて、「いかないよ」といった。

「うん。わかった」

と、承諾（しょうだく）したアルルは浮かない表情をしていた。

「アルル、お茶しようか。」

優貴は表情をころりと変えてそう言った。

「うん？」

アルルは首をかしげた。

「紅茶をのもう？」

「うん！！」

元気そうに返事をするアルルを見て優貴はほっと息をついた。

ミトは腐男子だ。

まあ…別に普通に恋をするっていうのは嫌いじゃないけど…

「あー…できてんなー」

窓から庭を見下ろしながらにやにやと…
これって相当キモくないか？
なんて思いながらもアルルと優貴の姿を眺める。

「（あ―このままあっちの方向に行ってくれないかなー）」

なんて頭で変人じみた妄想をしながら窓の桟（さん）に肘（ひじ）をついた。
その刹那（せつな）、

ドゴス！！！

一瞬にしてそれは消え去った。

「いってて…」

そう言って横腹を抑える。

何だよ！！アイツは怪獣か？ゴジラがここに存在してるのか！？
なんて、被害妄想の多い感想が頭の中に浮かんでくる。

「おい！！ミト！！またなんか妄想してたのか？にやけてたぞ！キモかったぞ！」

人に対して失礼なんて言葉はこいつに通じない気がして心が折れた。

「ノウン…お前…突進するなって。猪（いのしし）かよ！お前は！ウチはこの家に野生動物を飼った覚えはねえぞ！！」

そんなことを言いながら笑顔のノウンを見やる。

「ばーかばーか！お前が妄想ばっかしてるからだ！！！」

へぇーと少し微笑を浮かべるとノウンはひるむ。

「な…なんだよ…」

壁に追いやって手を着いて行き場をなくして顔を近づけると、ノウンはわずかに顔を赤く染める。

「誘ってんの？そーゆーの。」

「そ…そんなこと…／／／／／／／／／」

あぁ、ますます可愛く見えてきた。

そうして、廊下に誰もいないことを確認すると

静かに唇をあわせた。

第1話　完

●**sweeten**●

●ｓｗｅｅｔｅｎ●　第２話

カエは、とても静かなものを好む。
ドイツで作られるザッハトルテのチョコレートのように大人気のある、主張（しゅちょう）のない、そんな静けさを好む。
だから、美羽のような優しい子を好きになる。

「…カエお兄ちゃん…」

服の袖を引かれてカエは読書を中断し、服を引いている…引っ張っている美羽の方を向いた。

「美羽…どうしたの？」

少し頬を赤くしふくらました美羽を抱き上げ、自分の膝の上に乗せる。
カエより小柄な美羽は膝の上にちょこんと乗る犬の様だった。

「優貴お兄さんが帰ってきたって…」

「そっか」と笑みを見せれば自然と美羽も笑みになる。
なんてかわいらしいのだろうか…。

「でも優貴はきっとこっちには顔を出さないだろうね」

そう言えば美羽は頷く。

美羽から優貴の話を聞く名は珍しい。

「でも、どうしてそのことを話すんだい？」

思った疑問をそのままぶつけてみた。

多少の沈黙があって…

「優貴おにいさんとね…話してみたいなって思った」

と、

そんなことを言った。

「でも、話せるかい？」

その一言で美羽はきゅっと唇をかむ。

いつもの癖…

美羽は優貴程でもないが人と話すことができない。

過去に何があったかは知らないが…きっと性格上そうなのだろう。

話す話題がないのではない。ただ人と話すのが怖い、話を鼻であしらわれるのが怖いのだ。

泣きそうな顔になってきたから話を中断して抱きしめてやった。

「無理はしなくていいよ。きっと話せるようになる。」

「……うん」

小さな声が耳に伝わった。

いつの間にか寝てしまった美羽を眺めながら
始まりの日を思い出す。
此処に来た時のことだ…。
扉を開ければバスケットを持った美羽がいた。
勿論初めて会ったから「初めまして」と、
声をかけた。
相手は…美羽は唇をかみしめて小さな声で
『ハジメマシテ』
と答えた。
ニコリと微笑むと美羽も紅い頬でニコリと微笑んだ。
そのまま2日、何も進展もないまま、過ごしていると、
ドアを小さくたたく音が聞こえた。
ドアを開ければあの日の美羽がいた。
頬を紅く染めて立って、バスケットを両手に、家の中にもかかわらず青いリボンがついた
麦わら帽子を深くかぶってる美羽がいた。
「どうしたの？」
としゃがんで目線をあわせれば
一度逸らし、まっすぐと自分を見つめた。

「…」

何も言おうとしなかったから「中にお入り」と手を引いた。

「う……」

と小さな声が美羽の口から聞こえた。

「…どうしたの？」

もう一度訪ねるとやはり目を逸らす。

「飴でもお食べ」と微笑むと、つられて美羽も
ニコリと笑い『ありがとう』と言った。

飴玉を口に入れるとバスケットをずいっとだす。
そうして『おすそわけ』っと…
ポツリと言った。

開けてみれば中には可愛らしいフルーツタルトが入っていた。

「ありがとう」

といえば、
子供が喜ぶような素直な笑顔を浮かべた。

「あの頃が懐かしい」

と、呟く。

あのタルトの味はまだ覚えている。
とても、優しい味で、それでいて子供の様に素直な甘み…。
一言で言えば「おいしかった」なのだろうけど…
それよりたくさんの言葉が、たくさんの感情が
あのタルトにはあった。

「また食べさせておくれよ？」

そう眠る美羽に呟いた。

第2話　完

●sweeten●

●ｓｗｅｅｔｅｎ●　第３話

紫衣(しえ)…

…と

呼ぶ声がした。

気がするだけだと…自分に言い聞かせる。

あの家を離れてから…俺は、何も変わっちゃいない。

「ああ…うっとうしい」

春の生温さを感じながら…時計に目をやる。

『だらしすぎてやってられない…』

あのいたずらっ子は何処で何をしているだろうか…。

また、ここへは来てくれないのだろうか…

気が付けばあの子の事ばかり考えている…。

「嗚呼…面倒だ…」

「なーにが面倒なんだよっ！！！！！！！」

そんな言葉とともに頭に硬物を感じた。

「ピエ…。それが挨拶かい？」

頭に乗せた足を手で払いのけるとくすくすと笑った。

「…うっせー。お前はいつまで此処でジメジメしてんだよ…」

「さあね…」

そう言った紫衣に呆れたようにピエはため息を吐いた。

「昔のあんたはどこ行ったんだ…。あんなにやさしかった。あんなに人見がよかった。なのにいったいどうしたよ。」

彼はフと笑って椅子に深くかける。

「きっと…」

「つかれたんだろうね」とため息まじりに苦笑。

「ピエ…」

「なにさ」

「お前の事嫌いっていったら…怒る？」

一瞬時が止まって…

それから

ピエは

震える声で
でも、震えを隠して…
「怒る」
と一言、
答えた。
「あんたが好きって言ったんだ。自分勝手に終わらせるな。責任を持て。」
そんな言葉を言うとは思わなかった。
「っふふ…珍しいな。お前がそう言うの…」
そう言って馬鹿にして、笑った。
本当は…馬鹿にしたくなかったけど…。
そうして大声で笑っていると、
目の前に影がかぶさった。
「俺は…真剣だ。」
そう言って、瞳をとらえる。
「お前の事…好きだ。」
そう言われて…初めて、自分が愛されていることに気が付いた。

「どうなっても俺は責任をとらないぞ」

ピエは頷いた。

一目ぼれしたあの時から…後戻りできなくなってる
なんて
自分がこれだけ、人に愛されてるなんて
しらなかった。
何も知らなかった。

「正直、お前と恋していいのかわかんなかった。」

首筋に浅いキスを落としながら吐息まじりにそう言う。

「だから、こうやって冷たくしてた。」

肩越しに感じる鼓動の速さを自分に刻みながら、
言葉を紡ぐ。
「でも…初めて知ったよ…。愛されてることに…」

小さなうめき声を出したピエを強く抱きしめる。

「だから…俺は…昔の俺に戻る…」

肩越しの返事を聞いた。
小さな小さなか細い返事…。

それだけで胸がいっぱいになった。

「ほら、行こう？家に…」

「う…ん」

薄暗い、屋敷を出て…

明るいところへ…

暖かいところへ…

皆が待ってるから…

第３話　ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2261x/

●sweeten●

2011年10月30日02時27分発行